

「愛する息子を送る主人」 マルコによる福音書 12章1～12節

イエス・キリストの年の2021年、あけましておめでとうございます。今年もいろんなことがあるかもしれませんが、神さまを信頼し、一緒に歩いて行きましょう。

今日からまたマルコ福音書に戻りたいと思います。今日は12章のところですよ。イエスさまの都エルサレムでの最後の1週間を描いています。

イエスさまはエルサレム神殿の一番外側にあった異邦人の庭で商売をしていた人たちの机やイスを壊れるほどにひっくり返し、商売人たちを追い出された宮清めの事件がありました。それに対して、エルサレム神殿から莫大な利益を得ていたユダヤの最高議会の議員たちは激怒し、その代表者たちがエルサレム神殿にいたイエスさまのところにやってきて、「お前は何の権威でこんなことをするのか」とイエスさまを問いただしたのです。今日の聖書はその話の続きです。イエスさまはユダヤの宗教的・政治的指導者たちに対して、この「ぶどう園と農夫」のたとえ話を語られたのです。

ある一人の主人が、ぶどう園、ぶどう畑を苦労してつくり、整備し、そのぶどう園を農夫たちに貸して旅に出ました。旧約聖書では、イスラエルの民がしばしばぶどう園、ぶどう畑にたとえられています。ここでもぶどう園の所有者、主人は神ヤハウェで、農夫はイスラエルの指導者たち。そしてぶどう園は神ヤハウェにより最初に神の民に選ばれたイスラエルの民のことです。主人はぶどう園の世話を農夫たちにまかせて旅に出ます。ぶどうの木は植えてから5年くらいで、ぶどうの実を収穫できるようになるそうです。月日が流れ、ぶどうの実を収穫する時がやってきます。ぶどう園の主人は収穫の時になると、自分の僕を送り、ぶどう園を管理している農夫たちからぶどうの実りを受け取ろうとします。神ヤハウェは御自分の民イスラエルから良い実りを期待されました。神ヤハウェはイスラエルの民が神を信頼し、神の言葉に従い、世界の人々に神ヤハウェを証しするような良い生き方、正義、敬虔な信仰、愛の業という良い実りを収穫できることを望んでおられました。

神ヤハウェが送られた僕とは、神の言葉を語る預言者たちのことです。王国時代から国が滅んでいく時代に、神は何人もの僕、預言者たちをイスラエルの民のところに送られたのです。さて、このたとえで、ぶどう園の所有者、主人が送った僕に対して、農夫たちはどういう態度をとったのでしょうか。農夫たちの態度は衝撃的です。

3節「だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。」

農夫たちはぶどう園の主人と前もって約束していた収益の配分金を払わず、送られてきた僕を捕まえて、袋だたきにし、何も渡さずに、手ぶらで帰らせたのです。なんて悪い農夫たちでしょうか。農夫たちは主人からぶどう園の管理をまかされているのに、自分たちにまかされた仕事を誠実に果たそうともせず、ぶどう園から出る利益を全部自分たちのものにしたいと思い、主人が遣わした僕に暴力をふるい侮辱し、何も持たせないで追い返したのです。皆さん、この

たとえを読んでどう思いますか。この農夫たちはなんという悪い奴らやと思いませんか。もし私が主人なら、1人目の僕が暴力を振るわれ、侮辱され、手ぶらで追い返された時点で切れて激怒すると思います。もう絶対農夫たちを許さんと切れています。ところがこのたとえ話に出て来る主人は、本当に忍耐強い方で、農夫たちから悪意に満ちた冷たい態度を取られても忍耐し、2人目、3人目と使者を送り続けるのです。主人が送った2番目の僕は農夫たちによって、頭を殴られ侮辱されました。3番目の僕は殺されてしまいました。農夫たちの悪意と暴力は益々エスカレートしていきます。主人はそれでもあきらめず、僕を送り続けますが、農夫たちによって、なぐられ、暴力を振るわれ、侮辱され、虐待され、殺されてしまいます。この主人が送り続けた僕は、旧約聖書の預言者たちです。特にイスラエルの王国時代に、預言者たちは遣わされ、神の言葉を語り続けました。預言者たちは厳しい神の言葉も語りました。イスラエルの民に対して、そして指導者である王に対して、「今のように神ヤハウェを忘れ、自分勝手に欲望のままに生きていたらだめだ。生きる方向を変えて、もう一度神ヤハウェのもとに立ち帰りなさい。神に従う生き方をしなさい」と語り続けました。しかし王も民も、厳しい神の言葉を聞こうとはしませんでした。むしろ厳しい神の言葉を語る預言者たちを迫害し、苦しめ、殺したのです。神さまは本当に忍耐強い方です。拒否され、ひどい目にあわされても、忍耐し、何百年にもわたって、神の言葉を語る預言者たちを次々と派遣されたのです。しかしいくら預言者を送っても、イスラエルの指導者も民も、創造主である神ヤハウェのもとに帰って来ないので、主人である神は驚くべきことをされます。それは私たち人間の常識をはるかに超えたことです。

6節「まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。」主人である神は僕、預言者たちを送ってもみんな拒否され、ひどい目にあわされるので、最後に自分の愛する独り息子を送るのです。それがイエスさまです。

6節の「最後に息子を送った」の「最後に」は「エスカトン」という言葉で、神さまの救いの御計画の決定的な成就の時、終末の時という重要な意味があります。神さまは人間を救う救いの御計画の最終手段、決定的な手段として、つまりもうこれしかないという救いの手段として、愛する独り子イエスさまを救い主としてこの世に送る御決断をされたのです。

神さまの愛は無謀だし、愚かにも思えます。でも神さまの愛は本当にすごいと思います。

これだけ神さまのもとに帰って来なさいと招き続けても、嫌だと拒否し、自分勝手に生き続ける人間の心と生き方を変えて、滅びから救い出すには、もうこの方法しかない。愛するイエスさまを送って、その大切な命を差し出し、十字架で犠牲にするしかない。そうやって、私たち人間を創造主である神ヤハウェのもとに連れて帰るしかない、神さまは決断されたのです。私なら自分の愛する大切な子どもを、敵意をもって欲望のままに生きている人間のところに絶対送ったりしません。これは神さまにしかできないことです。神さまの愛は本当に忍耐強く、そして私たち人間の常識を超えています。「あなたを救うためだったら、私の大切な独り子イエスの命さえ犠牲にするよ」と言われる、この無謀とも思える神さまの大きな、大きな愛に、心揺さぶられ、神さまのもとに帰って新しく生きたいと思う者が、滅びから救われ、神の国に入れていただき、新しい命に生きる者とされるのです。